

あゝ国民学校

敗戦・ある代用教員の記録

永井健児

あゝ国民学校

敗戦・ある代用教員の記録

永井健児

朝日新聞社

著者現住所・東京都渋谷区恵比寿3-18-7

あゝ 国民学校

定価 580 円

——敗戦・ある代用教員の記録——

昭和47年8月10日 第1刷

著者 永井健児

発行者 朝日新聞社 角田秀雄

印刷所 共同印刷株式会社

発行所 東京・名古屋
大阪・北九州 朝日新聞社

あゝ国民学校——敗戦・ある代用教員の記録——

「国民学校ハ皇国ノ道ニ則テ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的鍊成ヲ為スヲ以テ目的トス」

——国民学校令第一条

目次

日曜日の職員会議

1

戦争・十七歳で先生に

空襲と初登校

13

音痴の音楽授業

21

ポプラの学校

29

先生の出征

39

空襲と初の犠牲

49

疎開と分散授業

59

「死中に活を……」

70

八月十五日

79

敗戦・挫折の混沌たる日々を

子どもたちとの再会

85

「きつとかたきをうつ」

興亜室の解体

代用食の日

運動会論争

第二十八回大運動会

助教鍋

雨がサと弁当と

ある無力感

続発する弁当盗難

進駐軍の来校

闇夜のリヤカー

教員組合の誕生

年末・年始

187 178 172 163 155 146 141 134 128 117 113 103 94

平和・とまどいと模索の間で

教科書の使用禁止

体操の時間

教科書回収とスミ塗り

淡い慕情

「仰げば尊し」

去りゆく人

思想・悩みと新たな情熱と

春にそむいて

復活メーデー

ある転機

「退職ヲ命ス」

あとがきにかえて

267 256 249 241 235 228 222 216 209 202 193

日曜日職員会議

沖先生は、焦ったような早口で続けた。

「……現に、きのうも警戒警報が発令されているし、本当に戦争が終るのかどうか、日本が抗戦を続けられないかどうか、だれにも断言できないよ」

「いやあ、断言していいと思いますよ。きのうの警報は何かの間違いでしょう。陛下の詔書が出て、降伏したというのは厳然たる事実なんですから。それに、天皇陛下ご自身のご放送だってあったじゃないですか。とにかく教師として、子どもに敗戦をはっきり伝えて、戦争をしめくくってから新しく出発すべきですよ。私はそう思います」

突き放して断言する田島先生。

「陸軍は徹底抗戦だっていって、飛行機でピラまでまいたそうだ」

「……」

「灯火管制（空襲に備え、室内の照明を屋外にもれないようにする制限）だってまだやってるじゃあないか……」

敗戦の早急な確認を不満そうな口ぶりの沖先生。教頭より年輩で、一年生を担任。時には、校長よ

り権力を發揮する頑かたな老訓導（旧師範学校卒、有資格者）である。

重い沈黙が流れ、部屋の外から耳鳴りのようなセミの鳴き声が響く。

昭和二十年八月十九日の日曜日。群馬県高崎市の市立東国ひがし民学校。

きのうまでの「夏季授業を行はざる日」（夏休みとは呼ばなかった）も終つて、明日から授業が再開される前日、つまり、あの敗戦の八月十五日から四日目。初めての全職員（職員）の集会である。

一番廊下側で校庭に面してすわっている私からは、窓ぎわでこちらを向いている沖先生の姿は、外の強い陽射しでシルエツトにしか見えない。そのシルエツトの後方に見える校庭は、乾いた白い土に夏の太陽がぎらぎらと反射し、目がくらむようにまぶしい。日曜日ということもあって、門を閉ざした広い校庭には人っ子一人いない。それは死んでいるようだ。わずかに、東端の窓から部屋の中をのぞきこむようにはえている学級園のトウモロコシの葉と、校庭の端に沿って並ぶポプラの樹の上枝だけが、かすかに風にそよいでいる。

夏の太陽は高く、窓から入る陽射しはない。まばゆいばかりに明るい校庭とは対照的に、まるで、海の底のように薄暗い職員室。爆風で壊されないように、紙テープを米字型に貼った窓ガラスが並び、そのうえ、全体の約五分の一もある壊れたガラスの個所に、代用のベニヤ板や杉板が釘づけにされている。そのため、窓から光の入るのがさえぎられ、室内をいっそう暗くしている。

部屋の西側中央に教頭用の大きな机があり、その横に、隣の校長室から椅子だけを持って会議にの

ぞんだ校長がすわっている。各職員は、六人ずつが机を前にたがいに向き合い、北面の廊下側と南面の校庭側に、二列、東西に並んでいる。つまり、計二十四名。一年から六年まで、各四学級の構成である。

この二十四名の職員中、訓導が十七名。助教（旧中等学校卒、代用教員）が七名である。男女比は、男子八名、女子十六名。しかも、八名の男子中、四名が助教で、正規の男子訓導はたった四名。男子教員はほとんど軍隊にとられていた。文部省の、教育の戦時非常措置で、国民学校初等科（現在の小学校）以外の授業を中止していたのだが、かんじんのその初等科ですらこんな構成である。

他に女子養護職員（看護婦）、高齢の男子使丁（用務員）、給仕の女の子、各一名が在籍。

沈黙の薄暗い職員室には、すすけた板張りの天井から、笠もない裸電球が二つぶら下がっている。しんは黒く、ガラスだけが灰色に光っている。教頭の正面、部屋の東側には大きな黒板があり、「八月十九日（日）日直、新川、熊田」と一隅に書かれ、中央に次の文の記載がある。

校長会議 伝達事項

- 一、明日からの授業は平常通り実施。
- 一、当面、戦争や敵国に対する刺激的言動を避け、事態の推移を静観する。
- 一、流言にまどはされないやう児童を指導する。
- 一、各学級の戦争関係掲示物など、徐々に整理するも、児童に刺激を与へるやうな急激な転換

は考慮する。

一、明朗快活を当面の指導方針とする。

一、その他

ご真影（各学校に贈られた天皇の写真）奉還、朝礼、被戦災児童、心がまへ、など。

木村教頭が書いたものであろう達筆の大文字。暗い職員室の中で、その、太く白い文字だけが目立って浮いている。

会議はもう一時間近く続いている。

明日からの授業進行の打合せに八時半全職員が登校して、一応、ガリ版印刷されてあった「戦争終結の大詔」を奉読。続いて、市内校長会議の内容についての説明や討議に入ったが、校長会議伝達事項の二項め、「戦争や敵国に対する刺、激、的、言、動を避け、事態の推移を静観する」のところで議論が出て、沖先生と、戦争がもっと長びいたら軍隊に召集されたであろう、中堅訓導の田島先生の意見が対立しているのだ。『敗戦（終戦でなく）をはっきり児童に伝えるべきかどうか、という問題である。』

戦争が終ったとはいえ、状況はまったくわからなかった。事実、前の日の十八日も、正午近く、けたたましくサイレンが鳴り響き、警戒警報が発令され、敗戦の悲嘆にくれていた私たちを緊張させた。沈黙をやぶって、二年担任で女性で最古参の新川訓導が、椅子の背に手をかけ、体の向きを変えな

から発言した。

「天皇陛下の詔書まで出たんですから、徹底抗戦なんてありえないんじゃないですか」

沖先生のシルエットの、肩の部分がピクッと動く気配がした。

「まあとにかく、負けたんで……。そのしめくくりがあいまいだったら、これからの授業の進行はできないでしょう。とくに高学年では……」

と、しばらく黙っていた田島先生が続けた。

「それもわからないじゃあないけど、それじゃあ田島君は、子どもが、『先生は『勝つ勝つ』って教えたのに、どうして負けたんですか、嘘ついたんですか』なんて言ったら、何て答えるね。どう責任とるね。君のほうの六年生なら、そのくらいのこと言うよ」

と、沖先生ももつともなことを言った。

「それはそれで、だからいろいろ相談しているわけでしょう」

沖訓導と同じ校庭側にすわっている、六年男担任の田島訓導は答えた。

「たしかにそれで、はっきり、『負けたんだ』と発言したとしたら、十日くらい前まで、『神の国』であり、『究極の勝利』を教えてきた手前、高学年の担任など、子どもになんと説明すればいいのでしょうか」

今度は五年担任の女性、中山訓導の発言があった。自身に問いかけるような小さな声である。

「そんなことは仕方ないでしょう。教員ばかりでなく、親も、いやあ、政府が先にたつてそういつて

きたんだから……」

と、助教では一人だけ年上の、大柄な金村さんがおうような大声で言った。

「……」

また沈黙が続く。部屋に沈黙がくると、庭のセミの声がひとときわ大きくなり、話が始まると鳴きやむ。まるで、しめし合せたかのようだ。沈黙の合い間に、せんすの音と、だれか体を動かすたびにすわっている古椅子のきしむ音がする。

「とにかく、降伏したんで、負けたことは負けたんだしねえ……」

と、しばらくして私と同じ列に並ぶ、普段から無口な反崎男子訓導が、深いため息をしながらつぶやくように言った。

「だけど、たとえ高学年でも、『先生が勝つ、勝つって言った』なんてこと、そんなに気にするかしら……」

沖先生と向い合っている女訓導の木浦先生が、片手で顔の汗をふきながら教頭のほうを向いて発言した。すかさず、田島先生は木浦先生に顔を向けて、

「それは、木浦さんの受け持ちが一年生くらいだからいいけど、六年の男なんか、むしろおもしろがって聞くかもしれませんよ。今まで、『そんなことじゃあ戦争に勝てないぞ』てんで、ゲンコツだったくてたんですから……」

と言った。

田島先生の発言にたたまかけるように、沖先生が、

「じゃあ田島君、高等科(国民学校の上学年、現在の中学一、二年。義務教育)や中等学校なんかどうするね」と、意地悪い質問を發した。

田島先生のメガネが、沖先生に顔を向けた瞬間、鋭く、キラッと光る。

「逆に、まだ始末がいいと思うんですよ。そろそろ批判する力も出ているし、そのうえ、勤労働員(軍需生産の手足を補うための学生・生徒の強制作業召集)で工場へ行ったりして、**「勝たなければ」**とか**「必ず勝つんだ」**といった、肌で感じとった自意識があつたでしょうから」

そう言つて田島先生は正面に向きなおり、ちよつと言葉を切つてから、今度は自身にも聞かせるように静かに続けた。

「その点、初等科では、これといった意識もなく、ただ、先生の言うことは正しいと思つて……、いや、信じて、うのみにしていたわけですよ」

「じゃあ教師は、全部ざんげしろつてわけかね……」

沖先生が田島先生のほうを向いてから、不愉快そうに、横向きになつてそう言つた。特徴のある口ヒゲのシルエツトが見える。

しらけた沈黙が部屋の中によどむ。

私と、隣の千川男子助教と、その前に向き合う女性の葉山訓導、山本助教。四人の三年担任者はさつきから一言の発言もしていない。とくに、十五日の夕方、暗い宿直室で泣いていたきまじめな葉山

先生など、ほとんど顔を伏せたまま身じろぎもしない。まるで彫りの浅い快活な顔だちの山本助教も、表情がまったく動かない。

突然、体格のよい木村教頭が立ち上がった。立ち上がった教頭はテーブルの両端に指先をあてて、しばらくうつむいていたが、やがて顔を上げ、口を開いた。

「どうですか、大変むずかしい問題であり、いろいろ意見もあると思いますが、一応校長会で当面の見解が出ているわけですから、とくに勝ち負けに強くこだわらないで、先ほど校長より話のあった、『日本民族の将来を天皇陛下がご心配になって、戦争をやめることにした』、その『やめる』ということで、とりあえずいいじやありませんか。あとは、第二項の内容のように、しばらく推移を見ましよう。(校長に顔を向けて)ねえ、校長……」

教頭の発言を、目を閉じたまま黙って聞いていた校長は、小さくうなずいてから静かに立ち上がって言った。

「まあ、いろいろご意見もあるでしょうし、これはなかなかむずかしい問題です……」

校長が話し始めると、教頭は静かに腰をおろした。

「……このさい、児童をあえて刺激しない。あとの項に出てきますが、『明朗快活』、これを当面各学級の方針にしてください」

その口ぶりは、小声で、ただだどしかった。実直な人柄でもあり、また、校長といった責任者として、十五日以降心労が重なっていたのであろうか、やせた体がいつそうやせて、疲れが見える。

この校長の言葉で、敗戦を児童にどう伝えるかの問題の議論はしめくりになった。

その後、「流言」「戦争関係学級揭示物」「ご真影」などについて伝達や話合いがあり、話題は「朝礼」(全校児童校庭集会)に移った。そして結論として、朝礼は当分中止されることになった。炎天下のため、という理由であったが、今後の見とおしや方針に対して、全県的な統一見解がないため、学長が全児童に訓話するのが不可能であることが本当の理由だった。

「当分じゃあなくて、「氣を付け」「休め」なんて号令で、庭に整列すること自体にも問題が出てくるんじゃないですか。兵隊式だ、なんて……」

田島先生の隣の深瀬訓導が、体錬部の主任らしい発想を苦笑しながら言った。

「何しろアメリカは自由主義の国だというし」

「庭にうじゃうじゃかたまってるか……」

「並んで歩くのもいけなくなるかな」

「そんなこと言ったら、何もできなくなっちゃう」

ざわざわした空気がおさまったころ、沖先生が、

「いやあ、朝礼や整列どころか、学校だってどうなるかわからないよ。アメリカ兵に占領されてみなあ、日本人は教育なんか受けるから戦争を始めるんだ——なんてねえ」

と、吐き捨てるように言った。